「満州　日米対立の火種」　メモ

●満州こそが、満州事変に始まり支那事変、太平洋戦争へと発展する「日本の１５年戦争」の出発点

満州

現在の中国東北地方。清朝の時代、万里長城の海側の起点・山海関から東にある奉天省、吉林省、黒竜江省を「東三省」と言ったが、満州族が多く住んでいたので付けられた地名。

●「宝の山」だった満鉄（南満州鉄道会社）の権益

日露講和条約で日本が得たもの

▽樺太南半分の割譲
▽ロシアが南満州に持っていた権益
　①清国から借りていた旅順、大連の遼東半島租借地（期間25年）
　②長春ー旅順間の東清鉄道
　　一切の支線、付属する財産、炭鉱の経営権

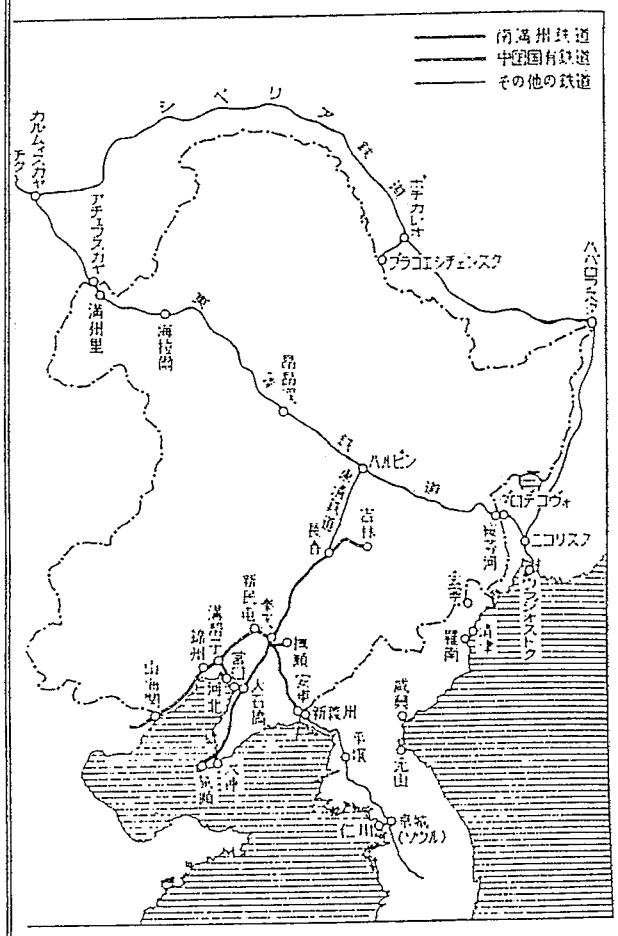
▽撫順炭鉱　石炭埋蔵量は10億トン

「満鉄十年史」（大正8年）

「一日一万噸、一箇年三百万噸採掘するも、尚三百年の命脈を保有し得べき東洋一の大炭坑なり。実に我が帝国の一大宝庫なりとす」

●満鉄は、単なる鉄道会社ではなかった
▽沿線地域を支配し　拡大を目的とした　国策会社
▽発足時（明治39年）の営業路線　１，１００キロ
　　敗戦時には　１０倍の１万１，０００キロに
▽鉱業・電気・水道など　関連事業は多岐に
　　一大コンツェルンを形成　満州の経済を独占
▽在留邦人の　教育・医療も委託され
　　小学校も　満鉄で作り　先生は満鉄社員
▽敗戦時の社員４０万人（うち　日本人約１４万）

●「満鉄王国」の青写真を作ったのは後藤新平
▽後藤（台湾総督府民政長官）は　明治３８年９月４日
　　児玉源太郎大将（満州軍総参謀長・台湾総督）を　奉天に訪問



満鉄創立時の鉄道網

特急「あじあ」号

昭和9年11月1日、大連ー新京（鐵）間701キロを平均時速82.5キロ、最高110キロ、8時間半で走らせた弾丸列車。日本では難工事の丹那トンネルが開通した頃で国鉄の誇る特急「つばめ」が平均速度67.2キロ、最高時速95キロだったから、大変な技術力だった。

機関車も客車も緑色。空気抵抗が少ないように流線型。洒落た展望車、冷暖房完備のデラックスな客車。「あじあ」の名前は3万通の懸賞募集から選ばれたが、満鉄の社歌に「東より光は来る　光をのせて東亜の地に」と歌ったように、それは日本の誇りであり、日本の満州支配の象徴でもあった。

▽日露講和条約調印前日の 台湾コンビの
　満州での再会は 何だったのか？
▽原敬は日記に「後藤は、桂太郎首相の依頼で
　児玉に後継内閣担当の意志があるか、確かめに」
▽この時には 桂・原の間で 密約が出来ていた
　・政友会が 桂内閣を支持すること
　・講和後は 政友会総裁西園寺公望を首相に

桂首相は原と４回の秘密会談

桂にとって、ロシアとの講和は厳しいものになりそうだ ― 領土・賠償金を取れるのか。結果如何では、国内の激しい反発が予想された。講和交渉を纏めても、議会を乗り切るには、議会第一党である政友会の支持が必要だった。

桂は旅順攻略にメドがついた明治37年12月8日、原と第1回会談をして政友会の協力を求めた。原は「政府の決心一尺ならば、我も一尺。政府一丈ならば我も一丈なるべし」と、西園寺への政権譲渡を迫った。桂は38年8月22日、第4回会談で、講和成立後、適当な時期に辞任することを約束。西園寺も、「屈辱講和反対」で騒然としている9月2日、政友会の会合で「今後戦争を継続するも、得る所は失う所を償うに足りぬ。講和成立こそ最も時を得たもの」と、桂内閣支持を表明していた。

桂は長州閥以外に、それも政党に政権を渡すとあって、円満な政権交替には、長州の有力な首相候補である児玉の意向を確かめておきたかったのではないか。

●後藤の本当の目的は、戦後の満州をどうするか、児玉と話し合うことだった
▽後藤は７月「満州経営策梗概」
　満州経営についての腹案を 児玉に届けていた

「満州経営策梗概」

戦後満州経営の唯一の要訣は、陽に鉄道経営の仮面を装い、陰に百般の施設を実行するにあり。是の要訣に随い、租借地内の統治機関と獲得せし鉄道の経営機関とは、全然之を別個のものとし、鉄道の経営機関は、鉄道以外毫も

後藤　新平（ごとう・しんぺい）
安政4(1857)～昭和4(1929)陸奥水沢藩出身。須賀川(福島)医学校卒。明治14年愛知県立病院長。独留学後、25年内務省衛生局長。相馬子爵家・財産相続騒動に巻き込まれ入獄。無罪となり、28年陸軍検疫部事務長官として日清戦争帰還兵の検疫に活躍、衛生局長に返り咲く。31年台湾総督府民政長官。39年満鉄総裁。41年桂内閣逓相。寺内内閣内相・外相を歴任し大正9年東京市長。12年山本内閣内相となり関東大震災後の帝都復興計画を立案。この間少年団連盟総裁を務め、日本のボーイ・スカウト育ての親

児玉　源太郎（こだま・げんたろう）
嘉永5(1852)～明治39(1906) 周防徳山藩出身。陸軍大将。明治20年陸大校長となり独軍制・戦術の移入に努めた。25年陸軍次官。31年台湾総督。33年伊藤内閣陸相、桂内閣にも留任し一時内相、文相を兼任。36年参謀次長急死で後任に。日露戦争では満州軍総参謀長として陸軍の作戦を担当、知謀をうたわれた。39年参謀総長。南満州鉄道会社創立委員長

原　敬（はら・たかし）
安政3(1856)～大正10(1921) 盛岡南部藩出身。郵便報知、大東日報記者を経て外務省に入り通商局長、次官。大阪毎日新聞社長となり明治39年立憲政友会創設に参加、幹事長を務めた。35年衆院議員に当選。逓相、内相を歴任、大正2年政友会総裁。7年米騒動で寺内内閣が倒れると、最初の政党内閣を組織し「平民宰相」として世論の支持を受けたが、東京駅で暗殺される。著に「原敬日記」

桂　太郎（かつら・たろう）
弘化4(1847)～大正2(1913) 長州藩出身。陸軍大将。陸軍次官、台湾総督歴任。

政治及軍事に関係せざる如く仮装せざるべからず。

▽この腹案こそ 国策会社満鉄の方向を 決めたもの
▽日本の満州経営は 児玉・後藤の
台湾コンビの手で 進められることに

●満鉄創業には打ってつけ、後藤の先見性・実行力

「大風呂敷」とあだ名された

新しい計画に夢中になり、次々と上司に意見書を出して、実行を求めた建白書好きは有名。ある人が桂首相と話していると、秘書官が「後藤が来た」と取り次ぐ。「後藤なら、さっきさんざん話して帰ったばかりなのに」 来客が不思議がると、桂は笑いながら「それが後藤の癖ですよ。何か思いつくと、帰り道の途中からでもやって来る。一日に五、六度も。もっとも、実行不能のものが大部分ですが、十のうち、一つか二つは、実に天下の名案、凡人には思いつけないようなものがある。そこに彼の価値がある」

▽理想を 抽象的なものから
具体的なものにする 特異な才能も 持っていた

苦学して医者に

水沢藩出身で高野長英は後藤の大伯父。12歳で県庁の住み込み給仕となり一緒に給仕をしたのが斎藤実。医学を志し、須賀川医学校(福島)に入ったが、遊廓では、女性には目もくれずに勉学に励む美少年の後藤を歌って、「下駄はちんばで着物はぼろよ。こころ錦の書生さん」

愛知県立病院医師になり明治14年院長。15年4月、自由党総理板垣退助が岐阜で暴漢に襲われ、診療依頼の電報が来た。自由党が危険分子扱いされている時、「やめた方がいい」 と言う者もいたが、後藤は「人命を救うのが医者の仕事だ」と出掛け、板垣に「ご負傷なさって、ご本望でしょう」 冷静で適切な治療に、板垣は「医者にしておくのは惜しい。政治家になれば、かなりのものになるだろう」と語ったという。

明治31年陸相。34年第1次内閣を組織し日英同盟を締結、日露戦争遂行。41年第2次内閣で韓国併合。42年内大臣兼侍従長。大正1年第3次内閣を組織するも、護憲運動の高まりに2か月で辞職

西園寺　公望(さいおんじ・きんもち)
嘉永2(1849)～昭和15(1940) 京都生まれ。公家の九清華家の出。戊辰戦争で山陰道鎮撫総督・北国鎮撫使。 明治4年渡仏しソルボンヌ大に学ぶ。駐墺・駐独公使を経て25年文相。33年枢密院議長。36年政友会総裁となり、39年首相。44年第2次内閣を組織したが、陸軍増師問題で陸相辞職、後任を得られずに総辞職。最後の元老として後継首相奏請に当たる

高野　長英(たかの・ちょうえい)
文化1(1804)～嘉永3(1853)陸奥水沢藩の医家に育ち、17歳で江戸の杉田玄伯、21歳で長崎でシーボルトに師事し蘭学を修める。江戸で開業し、天保9年「戊戌(ぼじゅつ)夢物語」を書いて、幕府の鎖国政策を批判した。翌年、「蛮社の獄」で投獄されたが、火災のおり脱獄。蘭書を翻訳しつつ潜行、江戸で幕吏に襲われ自殺

斎藤　実(さいとう・まこと)
安政5(185)8～昭和11(1936) 水沢藩出身。海軍大将。明治39年海相。大正8年朝鮮総督、昭和4年再任。7年首相となり10年内大臣。二・二六事件で暗殺される

板垣　退助(いたがき・たいすけ)
天保8(1837)～大正8(1919) 土佐藩出身。新政府参議となるが、征韓論争に敗れ下野。明治7年民撰議院設立建白書を提出、自由民権運動の先駆となる。14年自由党を結成し総理。15年、岐阜で刺客に襲われ負傷。29年伊藤内閣内相。31年憲政党を組織し、大隈内閣(隈板内閣)内相

●時代は、後藤の才能を政治の舞台へ

「親子のよう」と言われた児玉・後藤

明治28年初め、日清戦争が勝利で終われば戦地から将兵が一遍に帰ってくる。コレラ、インフェルエンザ ― 外地の伝染病をどう水際で食い止めるか。児玉(源)が頭を抱えている時、「この男にやらせたら」と後藤を推薦したのが野戦衛生長官の石黒忠悳。石黒には、西南戦争で薩摩からの帰還兵にコレラが異常発生した際、愛知から応援に来た青年医師・後藤の手腕が強く印象に残っていた。後藤は「相馬事件」に巻き込まれ、内務省衛生局長を休職になり、半年の拘置所生活を送って浪人中だった。

児玉が「経費はどれぐいかかりますか」後藤は「まあ、ざっと百万円」とてつもない金額に石黒がはらはらしていると、児玉は「百五十万円用意しましょう。その代わり、完全な検疫をやって下さい」児玉は「断ずること神の如し」と、決断が早く的確なことで知られた人。検疫に失敗して後始末に追われるより先手必勝と思ったのだ。臨時検疫部(部長児玉、事務局長後藤)が設けられ、不眠不休で下関、広島、大阪に検疫所が作られた。一番の問題は、一日も早く郷里帰りたがっている将兵が、素直に検疫に応ずるか。児玉は出征軍の総大将小松宮彰仁親王に真っ先に検疫を受けてもらった。後は「宮様もされたのだから」と、有無を言わせなかった。

検疫総数22万人。「世界でも例のない成功」と称賛された。

●児玉は第４代台湾総督に(明治31年2月)

▽民政長官に抜擢したのが ４１歳の後藤

▽病人の台湾を 健康体にするには
　まず 治療する側の 体質改善だと
　総督府の官制を改正して 組織を簡素化
　　官吏１，０８０人整理の 大ナタを振るった

▽軍人総督児玉のバックアップで 軍の発言を抑え
　民政優先を打ち出し 常に 先頭に立った

▽土匪対策でも「武力では治まらない」

石黒　忠悳(いしぐろ・ただのり)

弘化2(1845)～昭和16(1941) 福島県生まれ。江戸に出て医学所に学び、兵部省軍医となる。明治23年陸軍軍医総監。日清戦争で野戦衛生長官。近代軍医制度確立に貢献。大正6年日本赤十字社社長

相馬事件

福島県相馬6万石の旧藩主相馬子爵家をめぐるお家騒動。明治25年2月に当主が血を吐いて急死したことから毒殺告訴事件に発展。義侠心から告訴費用3千円を用立てた後藤は、誣告罪(不当な告訴)の共犯とされ、無罪にはなったものの半年間拘置された。

小松宮　彰仁親王(こまつのみや・あきひと)

弘化3(1846)～明治36(1903) 京都生まれ。伏見宮邦家親王の第8皇子。陸軍大将・元帥。明治3年東伏見宮、15年小松宮と改称。日清戦争で征清大総督

日本最初の植民地・台湾

小国日本が、柄にもないお荷物を抱え込んだようなもの。独立運動に、土匪といって武装ゲリラの反乱。明治29年からの国庫補助は1800万円の巨額にのぼり、政界や財界からは「金ばかりかかって。フランスが欲しがっているから2億円で売って、戦後の経常費に充てよ」の声も出ていた。

人使いのうまかった後藤

若い部下が深夜、出張先から帰ってくると後藤が待っている。「疲れたろう。一緒に風呂に入って、君の報告を聞こうと思って待っていたのだ」優秀な人材が後藤の下に集まり、「この人のためなら」と仕事に打ち込んだ。

▽自ら出かけて説得 反抗しないと 約束すれば
道路作業などの 仕事を与えた
どうしても従わない時だけ 軍隊を出し鎮圧

●台湾は児玉・後藤コンビの手で生き返った

新渡部稲造を台湾に招く

新渡部は札幌農学校教授をしている時、生後間もない長男が病死したショックもあってノイローゼになり、明治31年、転地療養のためカリフォルニア南部の海岸に移住した。病状は1年半ほどで快方に向かい、32年12月、フィラデルフィアで出版した「武士道」は、セオドア・ルーズベルト大統領を日本贔屓にさせる。

教壇に戻ろうと考えている時、農商務大臣から電報が来た。「後藤が台湾殖産局長への就任を強く要請している」後藤からも何度も懇請の手紙が来て、同じ岩手県人であり承諾した。

その際、自分が研究してきたのは北海道のための寒冷地農業で、熱帯農業には知識、経験がない。1年間の猶予を貰い、ヨーロッパ各国の植民地における熱帯農業の成果を自分の目で見て調べた上で、という条件をつけた。

▽島内を視察した新渡部は
砂糖を 台湾の基幹産業に育てる計画を立てた
▽児玉「台湾の財政を確立したいのです。この計画はうまく行きますか」新渡部「それには、総督閣下のあくまでやり抜くという条件がつきます」
▽児玉の「わかった。よし、やろう」
この一言で 台湾の精糖事業は 実行に移された
▽新渡部の提案で ハワイから
サトウキビの改良品種を 輸入すると
後藤は 肥料と一緒に 無料で配らせた

後藤の信条

病人や貧民になってから与える百円より、ならないようにする一銭の方が大切なのだ。

▽細々と作られていた砂糖は
巨大な利益を上げる 産業に成長し
完成した台湾縦貫鉄道は 産業開発の動脈に

新渡部 稲造(にとべ・いなぞう)
文久2(1862)～昭和8(1933)盛岡南部藩出身。札幌農学校に学びクリスチャン。東大で英文学、米・独へ留学し農政学、経済学専攻。明治24年札幌農学校教授。台湾総督府技師、京大教授。39年一高校長。大正3年東大教授となり植民政策講座を担当。7年東京女子大総長。9年から国際連盟事務次長として活躍し生涯を国際平和に捧げた。著に「武士道」

ルーズベルト(Theodore roosevelt)
1858～1919 オランダ系名門の出。共和党選出の副大統領在任中、明治34年、マッキンレー大統領が暗殺され第26代大統領に就任。パナマ運河敷設権獲得、日露戦争の講和を調停するなど積極外交を展開した。39ノーベル平和賞受賞

読売新聞の恩人・後藤

大正12年12月27日、摂政宮だった昭和天皇が無政府主義者難波大助に狙撃される「虎ノ門事件」が起こり、山本権兵衛内閣は総辞職。警視庁警務部長になったばかりの正力松太郎も懲戒免官となった。内相の後藤は「退職金も出ず、気の毒なことになった。ここに一万円あるから、二、三年ゆっくり休め」正力は辞退したが、3週間後に「十万円都合出来れば、破産寸前の読売の経営を任せる」という話が持ち込まれた。相談を受けた後藤は「新聞経営は難しいと聞く。失敗したら、無理に返済することはないぞ。しかし俺が出したことは内密にしておいくれ」と、十万円都合してくれた。

後藤の死後、麻布の自宅を抵当にして借りた金だと知って正力は感激した。「死後、後藤家には五十万円の借金が残った。遺族は不動産を処分して整理したが、借金によって政治活

日本の公民館第１号

昭和16年11月、正力は後藤の13回忌にその恩に報いるため、生地水沢(現奥州市)に「後藤伯記念公民館」を贈った。後藤の甥の椎名悦三郎と相談して、後藤が唱えていた「自治」、「公共」の精神にちなみ、「公民館」と名付けた。後藤の言う「自治」とは、自律する心のこと。

平成19年、後藤の生誕150年を記念して「後藤新平賞」が創設された。第1回受賞者は台湾の李登輝前総統で、授賞式で「後藤は欧米諸国の搾取目的の植民地経営とは異なり、野蛮の地に20世紀の文明をもたらした大恩人。自治と公民を愛した」と挨拶している。

●後藤の満州経営策は、台湾の成果を土台に立案

▽推進力にしたのが満鉄

総裁は１年７か月(昭和39年11月～41年7月)だったが

口癖は「一に人、二に人、三に人」

▽民間から 若くて優秀な人材を 引き抜き

形式にこだわらず 創意工夫を大切にする

活気にあふれた 満鉄の社風が 育っていった

▽特急「あじあ」号の 世界初のエアコンは

旅順工大を出たばかりの ２４歳の青年技師

後藤の細心な配慮

太平洋戦争で日本は、シンガポールを昭南島と改名したが、満鉄総裁の後藤は、駅名を日本語にしたり、日本読みにすることはせず、従来通り中国語の読み方を続けさせた。住民を戸惑わせたり、感情を傷つけない配慮だった。

満鉄調査部は戦前「東洋一信用のある調査機関」と言われたが、これも「調査なくして計画なし」の後藤の信念から生まれたものだった。

後藤は、日清戦争直後に「国勢調査」を提案している。日本の実施は大正9年10月1日だが、後藤は台湾時代、日本に先駆けてやっていた。

●日米関係は、ペリーの黒船来航以来、５０年間は大体うまく行っていた

動をしていたのだ。その気になれば、いくらでも私財を作れたのに…」と、正力は語っている。

東京市長の退職金十万円も、そっくりそのまま育成してきた少年団に寄付している。潔い一生だった。

難波　大助(なんば・だいすけ)

明治32(1899)～大正13(1924)山口県会議員の家に生まれる。大正8年上京後に貧民窟の生活を見て、無政府主義者に。関東大震災後の社会主義者虐殺への報復を企て、摂政宮を狙撃したが未遂。大逆罪で死刑判決2日後、刑を執行された

正力　松太郎(しょうりき・まつたろう)

明治18(1885)～昭和44(1969)富山県生まれ。内務省に入り、警視庁警務部長在任中の大正12年、「虎ノ門事件」で免官。13年読売新聞社長。経営難を克服し、昭和9年読売巨人軍を創設、プロ野球育成に尽力した。戦後、A級戦犯容疑で逮捕されたが、釈放後、27年に日本テレビを創立し社長。29年読売新聞社主。30年衆院議員。原子力委員長、科学技術庁長官

椎名　悦三郎(しいな・えつさぶろう)

明治31(1898)～昭和54(1979)岩手県生まれ。後藤新平の甥。商工省の革新官僚として活躍し満州国勤務を経て昭和16年商工次官。戦後追放解除後、30年衆院議員(当選8回)。34年岸内閣官房長官。通産相、外相を歴任し、47年自民党副総裁となり49年「椎名裁定」で三木内閣を誕生させた

李登輝(り・とうき)

1923～　台湾の政治家。旧制台北高校、京大に学び、昭和63年国民党主席。平成8年最初の民選総統に就任。12年退任

▽日本は 近代化のお手本として
　アメリカに学び 岩倉使節団も 真っ先に訪米
▽アメリカも クラーク博士(札幌農学校教頭)など
　多くの人材を 日本に 送り込んで来た
▽グラント前大統領も 来日(明治12年)して
　明治天皇に 議会政治など いろいろ助言
▽日露戦争は 米の経済的支援があって 成り立ち
　ル大統領も 親身になって 助けてくれた
▽日露戦争が終わった頃から 急速に 対立関係に

●満鉄が、もう少しのところで日米共同経営に…
▽鉄道王ハリマンは
　満州に対する関心 むき出しに来日(38年9月1日)
▽連日のように 午餐会 晩餐会が開かれ
　「東清鉄道を日米共同でやろう」と 提案した
▽桂首相はじめ 政府要人が乗り気に
　中でも 強力に支持したのが 元老の井上馨

戦争中「大蔵大臣が3人いる」と言われた

本来の大臣は曽禰荒助だが、開戦時の日本の金貨は1億1700万円。厳しい戦時財政に曽禰は辞意を洩らし、天皇の「助けてやれ」のお声がかりで、財政通の井上、松方正義がバックアップした。しかし、2人の関門を通る方が大変で、ことに井上には、重要な財政方針について、予め了解を取り付けておくことが必要だった。

身の細るような戦後財政のやり繰り

戦費は20億円近くかかったが、公債も27億円に膨れ上がり、うち外債が12億円。利子が平均5%で、利子の支払いだけでも年6千万円。台風の季節、二百十日を心配したのは、米を担当する農商務省でなく、大蔵省だったという。稲作がやられれば外米を輸入しなくてはならないが、金貨で決済するには日銀の金庫は空っぽ。

新しく手に入れた樺太開発、旅順・大連整備。金のかかることばかり。「とても日本だけで東清鉄道を経営する力はない」誰もがそう思っているところへ、井上が賛成となれば、ハリマン提案は決まったも同然だった。

ペリー(Matthew Perry)
1794～1858 米東インド艦隊長官。嘉永6年浦賀に来航し開国を要求。翌安政1年江戸湾に再来、幕府と和親条約締結

クラーク(William Smith Clark)
1826～1886 慶応3年マサチューセッツ農科大学学長。明治9年日本政府に招かれ札幌農学校教頭。在任8か月だったが多くの人材を育てた。帰国に際し、生徒に「Boys, be ambitious」(少年よ 大志を抱け)の言葉を残した

グラント(Ulysses S. Geant)
1822～1885 第18代米大統領。南北戦争の北軍総司令官で国民的な英雄

ハリマン(Edward Henry Harriman)
1848～1909 米の鉄道経営者。ウオール街の相場師として成功、パシフィック、セントラル・パシフィック、サザン・パシフィックと、シカゴ以西の鉄道支配。日本の戦時公債500万ドルを引き受ける

井上　馨(いのうえ・かおる)
天保6(1835)～大正4(1915)　長州藩出身。文久3年伊藤博文と渡英。維新後、大蔵大輔。明治11年参議。18年伊藤内閣外相となり条約改正交渉する。農商務相、内相、蔵相を歴任し、財界に重きをなす

曽禰　荒助(そね・あらすけ)
嘉永2(1849)～明治43(1910)　長州藩出身。衆院副議長、駐仏公使、法相、農商務相を歴任、明治34年桂内閣蔵相。韓国副統監を経て42年統監。韓国併合を推進

松方　正義(まつかた・まさよし)
天保6(1835)～大正13(1924)　薩摩藩出身。大蔵大輔を経て明治11年大蔵卿。日本銀行条令、兌換銀行条令を制定。18年

●桂・ハリマンの間で予備協定の覚書(10月12日)

▽「日本が獲得した満州鉄道のため、資金を整える目的で日米のシンジケートを組織する」

日本は東清鉄道を出し ハリマンは金を出す

▽桂が 調印する積もりで 閣議に諮ったところ

逓信大臣大浦兼武が反対 調印延期を求めた

「外国資本を入れたら将来に禍根を残す」

「講和会議全権の小村寿太郎外相の帰国を待ち、その意見を聞いてから決定すべきだ」

▽小村は ハリマンと入れ違いに帰国(16日)

「何と馬鹿なことを。大勢の血を流し、莫大な国費を費やして、ようやく得た満州経営の大動脈を自らアメリカに売ってしまおうというのか」

▽小村は 桂に 予備協定破棄を 強く求めた

「この協定は、明らかに日露講和条約第六条にに違反している」

日露講和条約

第六条 露西亜帝国政府ハ長春旅順口間ノ鉄道及其ノ一切ノ支線並同地方ニ於テ之ニ付属スル一切ノ権利、特権及財産及同地方ニ於テ該鉄道ニ属シ又ハ其ノ利益ノ為メニ経営セラルル一切ノ炭鉱ヲ補償ヲ受クルコトナク且清国政府ノ承諾ヲ以テ日本帝国政府ニ移転譲渡スヘキコトヲ約ス 両締約国ハ前記規定ニ係ル清国政府ノ承諾ヲ得ヘキコトヲ互ニ約ス

第七条 日本国及露西亜国ハ満州ニ於ケル各自ノ鉄道ヲ完ク商工業ノ目的ニ限リ経営シ決シテ軍略ノ目的ヲ以テ之ヲ経営セサルコトヲ約ス

▽「清国政府の承諾を以て」

鉄道処分は 清国の承諾を得て 完全に日本のものにしてからでないと 第三者と交渉できない

▽小村は さらに 国民感情で迫った

「東清鉄道は日本の満州経営の足場です。それを自ら投げ出せば国民はどんなに怒るでしょう」

▽桂も 白紙撤回を 承知したが

井上は 最後までこだわった 「資金のない日本が、単独では東清鉄道を経営出来ない。こんな簡単なことが、君に分からぬはずはあるまい」

伊藤内閣蔵相。24年首相兼蔵相。29年第2次内閣で金本位制実施。内大臣

予備協定覚書(要旨)

満州鉄道並付属財産ノ買収、該鉄道ノ復旧整備改築及延長並ニ大連ニ於ケル鉄道終端ノ完整及改良ノ為資金ヲ整フルノ目的ヲ以テ一ノ「シンジケート」ヲ組織スルコト 両当事者ハ其取得シタル財産ニ対シ共同且均等ノ所有権ヲ有スヘキモノトス 満州ニ於ケル各般事業ノ開発ニ関シテハ双方互ニ他ノ一方ト均等ノ利益ヲ有スルノ権利アルヘキコトヲ原則トス 会社ノ組織ハ…日本ニ於ケル状勢ニ適応スルハ得策ナリト認メラルルニ付会社ハ日本ノ監督下ニ組織スルコトトスヘシ 尤モ事情ノ許ス限リ随時右ニ変更ヲ加ヘテ以テ結局代表権並ニ監督権ヲ均等ナラシムルコトヲ期スヘシ

大浦 兼武(おおうら・かねたけ)

嘉永3(1850)～大正7(1918) 薩摩藩出身。島根、山口、熊本県知事。明治31年警視総監。34年桂内閣逓信相となり、農商務、内相を歴任。大正4年大隈内閣内相。選挙干渉で議員買収が問題となり辞任

小村 寿太郎(こむら・じゅたろう)

安政2(1855)～明治44(1911) 宮崎県飫肥(おび)藩出身。明治8年文部省留学生としてハーバード大卒。外務省翻訳局長、次官、駐米・駐露公使を歴任し34年桂内閣外相。日英同盟を締結し、日露講和会議首席全権。駐英大使を経て41年第2次桂内閣外相となり、韓国併合を行なう

東清鉄道の歴史

ロシアは極東支配のため、明治24年5月、モスクワーウラジオストック間9200キロを結ぶシベリア鉄道建設にか

小村は米国で資金の道をつけてきた

帰国が遅れたのは講和調印後、体調を崩してニューヨークで療養していたためだが、ハリマン訪日を知り、その動向を気にしていた。ところがルーズベルト大統領の従弟モンゴメリー・ルーズベルトが金子堅太郎を訪ねて来て、「大統領はハリマン計画には不賛成だ」と伝えた。しかも、東清鉄道を日本独力で経営出来るよう、5大銀行から低利融資の了解も取り付けたと言う。機関車、客車、レールなど、鉄道資材は必ず米国から買う、という条件付だが、純然たる借金であれば、返せば済むことだった。

▽井上は 引き下がらない 「アメリカを満州に入れれば、ロシアの野望を抑えることが出来る」
米国資本を入れることで 満州に緩衝地帯

▽しかし 小村は「ロシアの脅威には、日英同盟で十分対抗出来る」 攻守同盟に 強化されていた

●最大の難関・井上を攻略した小村は、桂に緊急閣議を招集させ、予備協定を白紙に戻すことに成功した

▽大浦「小村の態度は神の如くであった」

▽若槻礼次郎「あれだけ苦労して講和会議を纏め、しかも国中の非難を一身に浴びた小村だ。元老も閣僚たちも、その小村の意見を容れないわけにはいかなかった」(古風庵回顧録)

▽サンフランシスコに着いたハリマンを待っていたのは 日本政府の電報だった
「なお一層の調査・研究を必要とするので、この覚書は未決と考えてほしい」

▽ハリマンは「日本は十年後に後悔するだろう」

●ルーズベルトは、なぜハリマン計画に反対したのか

米の「門戸開放」政策

米国は明治30年ハワイを併合、32年米西戦争でフィリピン、グアムを獲得、中国への経済的進路を開拓した。しかし、中国本土は欧州列強の勢力範囲が固まっていて、9月に国務長官ジョン・ヘイは「門戸開放」の原則を訴え、通商の機会均等を求めたが、分け入る余地は少なく、かった。チタから東は、露清国境のアムール川沿いに大きく曲がりくねっていて、建設に時間がかかる。ところが清国領内の満州里からハルビンと北満州を通れば、ほぼ一直線。

ウイッテ蔵相はここに目をつけ、29年6月、対日攻守同盟をエサに東清鉄道建設と80年間のロシア所有を清国に認めさせた。そして、遼東半島を租借地として取り上げた31年3月、旅順ーハルビン間の鉄道敷設権も獲得した。これが東清鉄道南部支線(満鉄)。

ウイッテ(Sergei Vitte)

1849～1925 明治25年ロシア蔵相。財政改革に手腕を発揮しシベリア鉄道建設を推進、極東への経済的進出を図る。日清戦争で日本の遼東半島領有が決まると、独仏と三国干渉して、清国に返させた仕掛人。日露講和会議全権。帰国後首相に就任、立憲政体を推進したが罷免

金子 堅太郎(かねこ・けんたろう)

嘉永6(1853)～昭和17(1942) 福岡藩出身。明治4年藩留学生として渡米しハーバード大で法学を専攻。帰国後、伊藤博文に重用され、帝国憲法起草に参加、農商務・法相を歴任。日露戦争中は米国に特派され、講和工作に貢献した

日英同盟(明治35年1月締結)

当初は、どちらか一方が戦争になっても他方は中立を守る。他の1国が戦争に加わった場合は参戦する ― 独仏がロシア側に加わることを牽制した防守同盟で、期間も5年だった。

ポーツマス講和会議開催中の8月12日、改定が行なわれ、一方が戦争になれば他方も自動的に参戦する攻守同盟となり、期間も10年となった。

残された地域は満州だった。
だから、満州を占領し独占しているロシアに対し、開放を約束して戦争に入った日本とは、利害が一致した。ルーズベルトが講和会議を斡旋したのも、日本がロシアに勝てば、門戸開放の条件が整うと見たからだ。金子は「東清鉄道は、日本が戦争でやっと手に入れたものだ。それをハリマンが金で引っ掻き回すのはよくない。それより、日本が独力で経営出来るよう資金援助してやれば、日本は約束を守だろう。ルーズベルトは、そう考えたのだ」
なお「門戸開放」は、米国の中国政策の基本になると共に中国の「領土保全」を意味するようになる。

●日本は、「満州開放」の国際信義を守るべきだった
▽ルーズベルトは 旅順陥落後(38年1月14日)
満州の戦後処理で 金子に 見解を述べている
「アメリカとしては、日本が旅順を領有し韓国を勢力範囲に入れることを認める。満州は清国に返した後、列国の保障の下に中立地域にすべきだ」「満州は清国に返せ」という重大なサイン
▽小村外相は 高平小五郎駐米公使への訓令で
清国返還に賛成しながらも 留保条件をつけた
「安全で秩序ある満州になるよう、清国が改革と善政をやってくれれば…」

●清国の頭越しに決められた鉄道守備兵
▽日本軍は 遼東半島に１個師団
占領地警備に ２個師団残して 凱旋した
▽占領地警備は 日露講和条約で
条約発効から１８か月以内(明治40年4月15日)に
日露両軍とも 満州から 撤兵する約束に
▽日本軍は 撤兵と入れ代わりに 鉄道守備兵配置
線路１キロにつき１５人以内
全体で１万４４１９人を ロシアも認めていた
▽小村外相は １１月１７日(38年)から 北京で
「清国政府の承諾」という
講和条約仕上げの交渉に入ったが 難航した

若槻　礼次郎(わかつき・れいじろう)
慶応2(1866)～昭和24(1949) 松江藩出身。明治39年大蔵次官となり大正1年蔵相。15年首相に就任したが、金融恐慌への対処を誤り辞職。昭和5年ロンドン軍縮会議全権。6年再び首相となるも満州事変で8か月で辞職。戦争末期に重臣として終戦に尽力。著に「古風庵回顧録」

高平　小五郎(たかひら・こごろう)
安政1(1854)～大正15(1926) 陸奥一関藩出身。明治32年外務次官。33年駐米公使となり日露講和会議では全権として小村首席全権を助ける。41年駐米大使

満州でなぜ「関東軍」？
戦前は「関東軍さえいれば…」と、満州にいた日本人の誰もが頼もしく思った陸軍の最精強部隊。もともとは、遼東半島租借地と満鉄の鉄道線路を守る部隊だった。
日本の関東は箱根の関から東だが、中国では万里長城の東端の関門である山海関から東、つまり東三省、満州そのものを意味した。ところが、清国から遼東半島を租借したロシアは、満州の先っぽに過ぎないこの地域を「関東州」と名付けた。日本も「満州支配」の野心むき出しの名称を受け継ぎ、関東総督府(のち関東都督府)を置いた。
大正8年4月、関東都督府陸軍部を廃止し関東軍が新設されたが、昭和6年9月、柳条湖で満鉄を爆破して満州事変を起こした関東軍は、本当に満州全域を支配してしまった。

露清条約では
明治29年の露清密約の際、東清鉄道に関する条約が結ばれた。条約では、鉄道とその従業員を全ての襲撃から守るのは、清国の義務とされ、鉄道会

▽清国側は ロシアに認めていた特権を
この機会に 少しでも 小さくしようとし
鉄道守備兵問題では 日本軍を撤退させ
代わりに 清国兵による鉄道保護を 提案した
▽袁世凱(直隷総督)は「外国の守備兵を留めることが
危険だというのは、今や清国全体の意見だ」
▽小村は 「日本の心配は、ロシアと再び戦争になる
ことだ。だから、ロシアが北満州の鉄道守備兵を
撤兵させれば、日本も同時に撤兵する」
▽ロシアに 下駄を預ける形で
清国の同意を取り付けたが 小村には
「ロシアが撤兵を承知するはずがない」の読み
▽ロシアは引かず
日本は 独立守備隊第１大隊を編成(39年7月)
奉天など 主要駅に ６個大隊を配置した

●２２回の会談で「日清満州条約」締結(38年12月22日)
▽清国は ロシアの満州での権益を
日本が そのまま 引き継ぐことを 認めた

条約の特徴は同時締結の付属協定に

①日本が戦争中、軍事鉄道として敷設した安東ー奉天間の鉄道を、日本のものとして改修、運用すること②満鉄と並行する鉄道を建設しないことを、清国側に約束させた。
満鉄は、満州を縦断する唯一の幹線だから価値が大きい。この「満鉄線並行禁止」は、南満州を日本の勢力範囲にするための重要な規定であり、列強資本の満州進入を防ぐ狙いだった。そして後々まで、中国の自主的な鉄道建設に、反対する武器として使われることになる。

▽袁世凱は「ロシアが煙草二本を持ち去ったのを
理由に、日本に一箱丸ごと持って行かれた」

●軍政に対する反感が、急速に占領地に広がった
▽占領地警備の２個師団は
治安を守るという名目で 行政権を握った
▽撤兵期限(40年4月)までに 日本に有利になることは
何でもやってしまおうと 占領軍気分で
▽軍政署が 言うことをきかない 清国の役人を首に

社は付属地内の秩序維持のため警察を任命する権限を持つだけだった。
ところがロシアは、条約を無視して軍隊を配置、日本の鉄道守備兵も、この違法行為にならったものだった。

袁世凱(えん・せいがい)
1859～1916　中国の軍人、政治家。李鴻章を継いで直隷総督に就任し北洋軍閥首領となる。辛亥革命で革命派と結び、明治45年清朝の宣統帝を廃して臨時大総統に。帝政実現を図ったが失敗する

小村の政府への報告(12月10日)

「露国ガ浦潮ヲ保有スル間仮令名義ハ変更スルコトアルモ全然其ノ鉄道守備兵ヲ撤スルコトナキハ固ヨリ明瞭ナルヲ以テ露国ト同時ニ撤退スルコトニトナシ置ケバ我ガ方ニ於テ適宜ト認ムル時機マデ自ラ守備兵ヲ置キ得ルノ結果トナリ事実上毫モ差支エナク」

満州に関する日清条約

第一条 清国政府ハ露国カ日露講和条約第五条及第六条ニヨリ日本国ニ対シテ為シタル一切ノ譲渡ヲ承諾ス
第二条 日本国政府ハ清露両国間ニ締結セラレタル租借地並鉄道敷設ニ関スル原条約ニ照シ努メテ遵行スヘキコトヲ承諾ス将来何等案件ノ生シタル場合ニハ随時清国政府ト協議ノ上之ヲ定ムヘシ

石光真清は手記「望郷の歌」に

「戦火に荒らされた満州鉄道沿線の都市には、市民が続々と帰来していたが、二年余にわたる災害から立直るにはまだ年月を要すると思われた。…一市民として旅行して意外に思ったことは、戦時中にあれほど満州市民に対して協調的であった日本軍が、まるで満州占

▽税金の徴収も 日本の軍隊がやった
　営口の港では 取り上げた関税で
　　軍需品の 荷揚げ岸壁を 勝手に造った
▽満州の人にとっては 横暴なロシア兵が
　横暴な日本兵に 代わっただけだった
　　日本人を「トンヤンキー」(東洋の鬼)と 嫌った
▽「満州に行けば何とかなる」満州ブームも
　商社 銀行 運送会社の支店・出張所が 各地に
　　小さな町にも 旅館 飲食店 売春業者
▽満州軍総司令部は 講和会議開催が決まると
　日本人にだけ 7月1日(38年)から
　南満州での 営業・居住を 許可した
▽日本人を 一足早く 占領地に入れ
　戦後の 経済独占の先兵にする 狙いだった
▽「門戸開放」の約束は
　まず 満州の軍隊から 破られていった

●満鉄沿線の土地を積極的に取り込んでいった

「付属地」という名前の小っちゃな植民地

東清鉄道には、鉄道に属する一切の権利と財産がついていた。鉄道用地そのものは、線路を中心に幅62㍍の狭いものだったが、「付属地」が曲者だった。鉄道には停車場、操車場、倉庫、従業員宿舎も必要で、露清条約では、鉄道会社が経営に必要なら周りの土地にも行政権を持つこと、排他的支配権を認めていた。

ロシアの方は、清国の主権尊重は建前だけ。警察権を取り上げて鉄道守備兵を配置しただけではなく、駅周辺の広大な市街地まで「付属地」にしてしまった。こうして鉄道線路はほんの一部で、市街地が大部分という「小っちゃな植民地」があちこちに出来上がり、この特権はそのまま日本のものになった。

▽満鉄終点・長春では 150万坪の広大な土地を
　50万円で買収 近代都市建設にかかり
　　満州国建国と共に 首都新京となった
▽満鉄営業時「付属地」は 5,400万坪にも

●桂内閣に代わり西園寺内閣(39年1月7日)

領軍であるかのように満州市民を敗戦国民扱いしていることであった。…駐屯部隊の傍若無人ぶりを各地に見て心が痛んだ」

石光　真清(いしみつ・まきよ)
慶応4(1868)～昭和17(1942) 熊本県生まれ。陸軍少佐。明治32年中尉の時に語学生としてシベリアへ。予備役になり、ハルビンで写真館を開いて情報収集に当たる。日露戦争では第2軍副官として従軍。戦後世田谷で3等郵便局長をしていたが、ロシア革命で大正6年再び軍の依頼によりシベリアで諜報活動に従事した。長男真人(毎日新聞記者)が昭和33年、手記を「城下の人」「曠野の花」「望郷の歌」「誰のために」の4部作として刊行

井口省吾少将(遼東兵站監)**の訓示**

「本月一日より満州の占領地内において、帝国臣民の実業に従事せんとする者の居住営業を許せしは、一は戦後満州における収利の基礎を固め、将来におけるわが文明扶植のために地歩を作り…」(明治38年7月5日)

井口　省吾(いぐち・しょうご)
安政2(1855)～大正14(1925) 静岡県生まれ。陸軍大将。陸大教官を経て日露開戦時の参謀本部総務部長。明治37年6月満州軍高級参謀。のち軍事参議官

外国人締め出しの落差

外務省には苦情が殺到した。英国船が大東江で繭の輸出貿易を再開しようとしても、日本軍に拒否された。ロンドンの煙草会社は、奉天に入れず、営業活動に支障が出ている。

逆に活況を呈したのが日本の紡績。開戦当初は不景気に喘ぎ倒産業者も出たのに、軍需景気に助けられた。陸

▽加藤高明外相が 突然 辞職した(3月3日)

表向きの理由は鉄道国有化反対

当時の国有鉄道は東海道線、北陸鉄道くらいで、山陽鉄道が三井、九州鉄道が三菱と大半が民間経営だった。西園寺内閣は、軍事輸送と戦後財政の観点から、鉄道国有法を公布(3月31日)したが、加藤は三菱の意向を受けて反対、辞職したと言われた。しかも鉄道国有は、外相の職務とは関係ないのに、辞職理由を「鉄道国有で意見を異にす」と書いた。

明治天皇も意外に思われたらしく、「これは異例ではないか」と聞かれたが、西園寺首相は「大臣として立派な態度と思います」と答えている。西園寺は、加藤辞職の真意が満州問題にあることを知っていたのだ。

▽軍政をめぐり 外務省と陸軍の対立だった

「大磯秘密会談」(2月16日)

元老伊藤博文の大磯の別邸で開かれ、出席者は伊藤、西園寺、加藤のほか、元老の山県有朋、井上、大山巌に参謀総長の児玉。加藤は日記に「すこぶる重要な案件は、児玉大将が熱心に主張するため解決できなかった」 原敬は日記に「満州開放問題に関し、陸軍は明年四月迄外国に開らくを不可なりとし、 外務は外国との関係上之に反対したるにより」 陸軍は撤兵期限ぎりぎりまでの軍政を主張、加藤は「責任ある外交は出来ない」と辞職を決意、陸軍との対立表面化を避け、鉄道国有を口実に選んだのだ。

●米英からも厳重抗議が相次ぎ、満州問題は一日も放置できない重要問題に

▽米国務長官の抗議文(3月26日)

「…之カ為メ該領土ノ撤兵ヲ終了スル頃ニハ、他ノ外国ノ通商ニ充ツヘキ余地ハ 稀有若クハ絶無タルニ至ルヘシ。世界列国ノ正常ナル通商及企業ニ対スル『門戸開放』ニ同意スト云ヘル 日本国従来ノ熱誠ナル宣言ニ鑑ミ 斯ノ如キ行動ハ合衆国政府ノ甚タ痛惜スル所ナリ」

軍の軍服は、冬が羅紗地の紺、夏が白では、敵の目標になりやすかった。急場しのぎに白服を茶褐色に染めさせたが、やがて全軍、イギリスにならってカーキ色の軍服を採用した。

一息ついた所へ、大きく開けたのが満州、韓国の新市場。鐘紡は花形株になり、紡績会社が次々と創業した。ある紡績会社専務は、「泥棒するより儲かる。いずれ外国紡績を満州、韓国から駆逐する」と豪語している。

加藤　高明(かとう・たかあき)

万延1(1860)～大正15(1926) 愛知県生まれ。英国留学後、三菱副支配人となり岩崎弥太郎の女婿に。駐英公使を経て、明治33年伊藤内閣外相。35年衆院議員。西園寺、桂内閣外相。大正3年、大隈内閣外相となり第1次大戦で対独参戦、中国に「21か条要求」。5年憲政会を組織し総裁。13年第2次護憲運動で首相に就任、普通選挙法、治安維持法を制定

伊藤　博文(いとう・ひろぶみ)

天保12(1841)～明治42(1909)周防の百姓の家に生まれ、松下村塾に学ぶ。尊皇攘夷運動に参加、文久3年井上馨と英国に密航。明治4年岩倉使節団副使として欧米視察。参議を経て内務卿となり、内閣制度、憲法制定、枢密院設置など国家体制を整備。18年初代首相に就任し4次の内閣を組織。3度枢密院議長。 33年立憲政友会を創設し総裁。38年韓国統監。ハルビンで安重根(韓人)に暗殺される

山県　有朋(やまがた・ありとも)

天保9(1838)～大正11(1922) 長州藩出身。陸軍大将・元帥。明治6年陸軍卿となり軍制確立、徴兵令を制定。11年参謀本部長。内相を経て22年首相。日清戦争で第1軍司令官。31年第2次内閣を組織、軍

▽マクドナルド英大使は 伊藤に書簡(3月31日)
「英米の貿易会社で、日本の軍官憲による満州での閉鎖主義は、ロシアの場合よりもひどいと公言されている」と述べ「日本ニ同情ヲ寄セ軍費ヲ供給シタル国々ヲ 全ク疎隔スル日本ノ自殺的政略ト評スルノ外ナシ」と 強調していた

●西園寺首相は、秘かに満州視察旅行(4月15日)
▽若槻・大蔵次官に「満州派遣」の辞令を出し
一行(20人余)に 西園寺が紛れ込む「お忍び旅行」
▽激戦地を見学 軍政署で 軍政官の報告を聞く
清国の役人を接待し その話を聞く
▽毎日 酒を飲んでいる 一見 気楽な慰安旅行に
若槻は 西園寺の決意を 痛いほど感じていた
「このまま軍政を続けていては、日本の信用に傷がつく。断然兵を引き揚げなければならないがそれには口先の議論ではダメだ。自分がこの二つの目で見て歩いて、もう差し支えないということでないと、議論の根拠が弱くなる」
▽西園寺は 我がもの顔に振る舞う軍人
それに対する 清国人の反感を実感して帰国

●元老伊藤は、西園寺の帰国を待って首相官邸に緊急会議を招集させた(5月22日)

「満州問題に関する協議会」

出席者は13人。[元老]＝伊藤、山県、井上、松方、大山 [内閣]＝西園寺首相以下外務、大蔵、陸軍、海軍大臣 [準元老]＝桂前首相、山本権兵衛前海相 [参謀本部]＝児玉総長

▽満州問題の国策を決める 最高首脳会議だった
▽会議は 終始 伊藤がリードし
矢面に立ったのが 陸軍を代表する形の児玉
▽伊藤は まず 英大使の手紙を紹介して
「こんな状態では列国の物議をかもす。このまま放任したら、満州だけではなく、中国全土の人心は日本に反抗するに至るであろう」
▽こう前置きして 軍政批判に入ったが
伊藤が 日本の国際的地位について
最も鋭い洞察力を持っていたことが 分かる

部大臣現役武官制を実施。日露戦争で参謀総長。元老として陸軍、政界に君臨

大山 巌(おおやま・いわお)
天保13(1842)～大正5(1916) 薩摩藩出身。陸軍大将・元帥。明治18年陸相。以後6代の内閣で陸相を務め日清戦争で第2軍司令官。32年参謀総長。日露戦争では満州軍総司令官。大正3年内大臣

マクドナルド(Claude M. Macdonald)
1852～1915 英国外交官。清国公使の時義和団事件で北京籠城戦を指揮。初代駐日大使となり日英同盟を推進した

公家

160家ほどあり、筆頭は「摂家」。近衛、鷹司、一条、九条、二条の5家。この家に生まれたら摂政、関白になれる資格があった。次の家格が「清華」。久我、三條(転法輪)、西園寺、徳大寺、花山院、大炊御門、菊亭、広幡、醍醐の9家あり、太政大臣、左大臣、右大臣に任ぜられた。

西園寺、駐屯軍司令官を叱責

奉天で盛京将軍・趙爾巽(ちょうじそん)を招待した時のこと。突然、末席から駐屯軍司令官の少将が「将軍ッ」と大声を張り上げた。いつもの気安さで、つい見下した感じで声をかけたのだろうが、西園寺の顔色がサッと変わったかと思うと「何だ貴様！」と一喝した。「無礼者、下がりおろう」といった名調子。若槻は「名優の芝居を見るような感じで一座はしんと静まり返った」と、回顧録に書いている。
西園寺は「あんな礼儀のない官吏もおるのかと思われることは、むしろ支那人に対して面目もない次第で、大きくいえば君を辱める臣だ」

▽火を噴くような 伊藤の発言
軍を内閣のコントロール下に 見事な文民統制
▽「満州は日本の属地ではない。
純然たる清国領土の一部である」 この見解が
外交の大方針として 確立されていたら…

西園寺首相は決議案を纏め全員が署名

①戦時組織の関東総督府を、平時組織の関東都督府に改める ②軍政署は、領事のある所は直ちに、その他も順次廃止する

●奉天は開放され(39年6月)、軍政問題は一応落着したが問題の根は深かった
▽鉄道経営とは「付属地」という
小っちゃな植民地を 経営すること
日本を 否が応でも 大陸に向かわせることに
▽最初の躓きは 海洋国家日本が 大陸に目を向け
満州の利権を 独占しようとしたところに
▽日本は 米英の経済圏に入ることで 生存出来る
米英と対立路線を 歩むうちに
その基本条件を 忘れてしまった

●南満州鉄道会社設立の勅令(39年6月7日)
▽満鉄設立委員長には 児玉が就任(7月13日)
後藤の 満州経営構想が 走り出す

後藤は一度は総裁就任を断っている

児玉から総裁就任を要請された後藤は7月22日、台湾から上京すると児玉宅を訪ね3時間ほど話し込んでいる。そして児玉は翌日未明、脳溢血で53歳の若さで急逝した。

後藤の話だと「満州では軍人が我がもの顔に振る舞っている。鉄道総裁の分際では、とても太刀打ちできない。どんな抱負をもっていても実現は望めない」— そう思って、児玉に総裁を断ったという。ところが、児玉急死を聞いて、「心機一転、弔い合戦というか、児玉の霊に報ずるため、総裁就任を決心した」(後藤新平伝)

●満鉄は、行政権も持つ日本最大の国策会社

山本 権兵衛(やまもと・ごんべえ)
嘉永5(1852)～昭和8(1933) 薩摩藩出身。海軍大将。明治26年大佐で海軍省主事、海軍改革に手腕を発揮。軍務局長を経て31年海相となり「六六艦隊」を整備した。39年まで在任。大正2年、12年首相

伊藤と児玉の激論

伊藤 軍政署なるものがある。これに関する規定を見ると、清国人が不満を唱えるのは当然であろう。今日、ロシアから譲渡されたものを保持するのは当然で何人も異義を挟むはずはない。しかるに実際の事実は、この範囲の外に出つつあるのだ。軍事当局者は、撤兵期限は十八か月であるから、明年四月までは、戦争中と同様軍事的措置をとって差し支えないとの解釈だそうである。この解釈に基づき、あるいは様々なる事業に着手し、あるいは租税を徴収しておられるようである。かくのごとき解釈をとらるるのは、余のはなはだ了解に苦しむところである

児玉 外国の感情は、今日に於ては伊藤侯の述べられた如き悪い状態ではない

伊藤 御演説中であるが、一言児玉大将に注意したい。満州における軍政実施要領なるものを見ると、名は軍政署であるが其実は純然たる民政庁である。殊に施政の方針を云々し、満州を目するに新占領地を以てするが如きは、徹頭徹尾、軍政以外に進出しているものといわねばならぬ

児玉 御説の通りである。関東総督府で編纂した満州軍政実施要領を初めて手にし、一読其不穏当なことを感じ、直ちに総督に注意を促しておいた。かくの如き規定は、領事が赴任すれば、凡て無用に帰するであろう

満鉄設立委員宛ての政府命令書(8月1日)

政府は、満鉄に対し株式配当や社債元利の保証など、手厚い保護を与える代わりに、満鉄の方は、重要業務に関しては政府の認可を求め、政府が指定する場合には、いつでも鉄道・土地などを提供する ― 特殊な関係が規定されていた。この命令書が秘密とされたのは「満州に関する日清条約」の趣旨に、明らかに違反していたからだろう。

また、満鉄に付属地の土木・衛生・教育に必要な施策を行ない、その費用を住民から取り立てる権利を与えた。それは、満鉄付属地から清国の行政権を締め出し、満鉄を付属地行政機関として機能させようとするものだった。

▽満鉄は 日本独占の形で 創立された(11月26日)

満鉄の株式募集(9月10日～10月5日)

ロシア時代の東清鉄道は、形だけは清国との合弁会社だった。だから満鉄も、株式を持てるのは、日清両国政府とその国民に限るとし、清国にも株式の公募開始を通知した。しかし、清国政府は日本の一方的なやり方に抗議しただけで、応募してこなかった。

資本金2億円のうち、政府出資の1億円は鉄道の現物出資。経営は外債に頼るとして、問題は民間の1億円が集まるかどうかだった。そこで満州は外地だというので、勅令で資本金の5分の1、払込みもその10分の1でよい ― 200万円集まれば、会社だけは出来るようにした。ところが爆発的な「満州ブーム」。民間は「満州は儲かる」の匂いを敏感に嗅ぎとっていた。9万9千株の募集に1万1400人余りが1億600株と、競争率は1千倍を超した。大倉喜八郎は全株申し込んで割り当てが91株。当然のように、何人かあった清国人の申し込みは無視された。

●満州の日本に、米国から警告した朝河貫一(エール大教授)

▽「日本の禍機」(41年11月26日)と 題して

「世界に孤立して、国運を誤るな」

伊藤 領事は人民の保護者ではない。帝国商工業の代表者である。人民保護の権は、宜しく之を清国に譲らなければならぬ

(児玉が満州経営のため拓殖務省のような新しい組織を提案すると)

伊藤 余の見るところによると、児玉参謀総長等は満州における日本の地位を根本的に誤解しておられるようである。満州方面における日本の権利は、講和条約によって露国から譲り受けたもの、即ち遼東半島租借地と鉄道以外には何もないのである。満州経営という言葉は、戦争中から我国人の口にしていた所で、今日では官吏は勿論商人などもしきりに満州経営を説くけれども、満州は決して我国の属地ではない。純然たる清国領土の一部である。属地でもない所に、我が主権が行わるる道理はないし、従って拓殖務省のようなものを新設して事務を取扱わしむる必要もない。満州行政の責任は宜しく之を清国に負担せしめねばならぬ

大倉 喜八郎(おおくら・きはちろう)

天保8(1837)～昭和3(1928)新潟県新発田の豪商の家に生まれ、安政1年江戸で銃砲店を開業。戊辰戦争はじめ西南、日清、日露戦争で軍需品の調達・輸送で巨利を博し、大倉財閥の体制を確立。明治31年大倉商業学校(現東京経済大)創立

朝河 貫一(あさかわ・かんいち)

明治6(1873)～昭和23(1948) 福島県生まれ。東京専門学校(現早大)を卒業し23歳で渡米、ダートマス大、エール大で比較法制史を専攻。明治39年エール大教授。36年間にわたり日本史とヨーロッパ中世史を講じた。米バーモント州で死去

▽朝河は　３３年後の日米戦争を　予測し

「日本の最も恐るべきところは清国に非ず、欧米諸国に非ず、実に己れをして不正の地に陥れ、清国および欧米をして、正義の側に立たたしむるにあり」

●「門戸開放」は、中国の「領土保全」の正義の声に

日本とアメリカの違い

義和団事件(明治33年)の時、アメリカは、賠償金で北京に大学、病院を作り、大勢の中国人留学生を米の大学に招いた。中国には「侵略から守ってくれる正義の味方アメリカ」のイメージが定着していった。

日本がロシアから譲り受けた権益は、全て期限付きだった。一番短いのが遼東半島の25年。日本が手にした時は7年経っていたから、大正12年には返さなくてはならない。満鉄も、露清条約では完成から36年経てば清国は買収できるし、80年で無条件返還となっていた。

日本は大正4年1月、世界中の目がヨーロッパの第一次大戦に注がれている時、中国に「21か条要求」を突き付けた。遼東半島と満鉄の期限99年延長が狙いだったが、この際だと、「政治、経済、軍事顧問に日本人を雇え」「兵器は日本のものを使え」「警察も日中合弁にしろ」　こんな雑多な要求が籠いっぱいに盛られた感じで、「不当な国日本」のイメージを膨らませた。

中国が受諾した5月9日は、「国恥記念日」となり、中国全土に反日、抗日の民族運動が燃え盛った。日露戦争が終わった時、横暴なロシアを破った日本は、中国の知識人にとって頼りがいのある友人だった。中国革命の指導者・孫文も日本に亡命したし、大正初めには、東京だけで5千人留学していたが、彼らは「21か条要求」と共に続々帰国し、反日運動の先頭に立った。

●日露戦争後の満州こそが、日本の曲がり角だった

▽児玉は　明治日本の　最も優れた軍人だったし

後藤　小村も人一倍　日本を愛した愛国者だった

「日本の禍機」

戦後、世界の日本に対する態度は急速に悪化している。日本は戦前も戦後も反復して東洋政策の根本を、清帝国の領土保全と列国民の機会均等の二大原則にあると公言しているが、現在はその原則に背いており、満州において最も甚だしいといわざるを得ない。

このため、戦後世界が露国に有していた悪感情は今や転じて日本に対する悪感情となり、当時日本に対して抱いていた同情は今や転じて支那に対する同情となった。米国が日本に同情したのは、日本が支那の主権および門戸開放を主張する堂々の正義の声であるためで、現在のように日本が背信と私曲により東洋に雄飛するならば、列国の公平な競争はこのため大いに妨害され、他日東洋の正義を擁護して列国競争の公平を主張するの任は勢い米国が負わなければならない。このため或いは日本と刃を交うるの大不幸をも冒さざるに至るであろうことを憂うる識者も少なくはない。

日本が南満州における方針、行為が従前と異なるところがなければ、日本は速かに世界に孤立し、日本と共に東洋の主たるべき清国を我が敵とし、且彼をして他の強国に頼らしめ、東洋の平和および進歩のために貢献するところ大なるべき日本が却て之を妨げる張本人と目せらるるであろう。

日本の当面せる危機とは、東洋の平和と進歩とを担保して人類の文明に貢献し、正当の優勢を保持して永く世の畏敬を受けるべきに拘らず、却て東洋の平和を攪乱し、世界憎悪の府となり国勢逆転することである。

▽「国益第一」に 考えるのは
当時の物差しでは 当然でもあった
▽「力こそ正義」の時代 ルーズベルト大統領も
パナマ運河が 欲しいとなれば
軍艦を送って パナマ独立を支援している

日本は「矩」を越えてしまった

幕末の日本は、欧米諸国と通商条約を結んで横浜、長崎などな開港場を設定したが、居留地が設けられ中国の租界同様に日本の主権が排除された。この不平等条約改正が、明治日本の悲願であり、大変な苦労をしたが、治外法権撤廃が明治32年7月。それからわずか6年にして、「付属地」を獲得したことで同じ痛みを中国に押しつける国になってしまった。

孫文(そんぶん)

1866～1925 中国革命の指導者。広東省出身。明治38年、東京で中国革命同盟会を結成し、三民主義を唱えた。辛亥革命で臨時大総統に就任したが間もなく袁世凱に譲った。中国国民党を創設、革命の完成を目指したが、中途で病死した

パナマ運河

パナマ地峡を開削し、太平洋と大西洋とを連絡させた運河。アメリカは、運河建設のためコロンビア共和国と99年間租借の条約を結ぼうとしたがコロンビア上院の承認が得られなかった。ところが明治36年11月、パナマ地区に革命が起こると、ルーズベルト大統領は軍艦を送ってコロンビア軍の鎮圧を妨害する共にパナマ独立を承認した。そして1千万ドルの一時金と25万ドルの年金と引き替えにパナマ運河地帯の永久租借権を獲得した。

運河は大正3年完成したが、露骨、かつ強引なやり方は内外の激しい非難を浴びた。なお運河管理権は、昭和52年の新パナマ条約により平成11年からパナマに移行した。